



NHK『プロフェッショナル・仕事の流儀～松本人志スペシャル』

(2010年10月16日ブログにて発表)

NHK『プロフェッショナル・仕事の流儀』松本人志スペシャルが放送された。ゴールデンタイムにNHK総合で、ダウンタウンの松本人志が出てくる。しかも、松本のお笑い芸人としての活動を取り上げるドキュメンタリー番組スペシャル版としてである。

松本は語る。自分たちが出てきた80年代後半は、漫オブームも終わって、お笑い芸人の価値は最悪だった。だからこそやってやろうと思った。

デビュー当時を振り返って松本は語る。舞台にあがると、最初はみんな誰だこいつらという目で自分たちを見る。ネタが始まると、みんなの自分たちを見る目が変わってくる。視線の変化を体験する時のゾクゾク感が好きだった。

松本は、自身の映画3作目では、監督に徹したいという。主演候補は、フジで深夜にやっていた『働くおっさん劇場』に出てきた素人の働くおっさん。

松本は語る。世界で一番面白い奴は、世界で一番面白くないという表裏一体論がある。世界で一番面白い奴は、自分のことを面白いと思っていない。

松本は語る。ただの芸術家になったら終わりだと思う。芸術家と芸人は違う。けど何かこう、ひざまずきたくないやんか。

『ダウンタウンのごっつええ感じ』放送時のコンセプトは、「笑いを全てやる。コントの可能性を追求する」

松本の笑いが、視聴者の求める笑い次第に乖離していく。「松本の笑いは難しい」という声がささやかれるようになる。放送開始から7年目、1300本のコントを残し、『ダウンタウンのごっつええ感じ』は放送を終了した。

多くのファンが求める笑い、自分が求める新しい笑い。この間にある葛藤が、松本を苦しめる。

47歳になった松本が、NHK総合でコントをやることになった。地上波で久々のコント番組である。

通販で組み立て式の機械を購入。何に使うのかわからないものを嬉々として組み立てる男の子というコントのアイデアが企画会議中に出た（「何に使うのかわからないものを嬉々として組み立てる」というのは、お笑いのメタファーだろうか）。

企画会議の結果、無茶苦茶な音声ガイドに従いながら、無茶苦茶な機械を組み立てる男の子というアイデアに固まる。

機械の値段は15万円。名前はD・A・P。正式には、ダイナミック・アドベンチャー・ポータブル（ダイナミック・アドベンチャー・ポータブルという言葉も、お笑いのメタファーに聞こえる）。

コントの収録現場にカメラが密着した。「ダイナミック・アドベンチャー・ポータブルは、ダイナミック・アドベンチャーをご家庭でも楽しめるようにするために作られた新商品です。」（この台詞は、お笑いというダイナミックなアドベンチャーが、テレビを通して家庭にもたらされると解釈可能だ。D・A・P＝テレビであり、テレビは優れた機械でなく、何の役にも立たないがらくただとも解釈可能）

D・A・Pのコントのオチをどうするか？ 「ええわ〜」と言うか、商品の文句を言うか、会議終盤まで結論は出なかった。松本はアドリブで、D・A・Pのお客さま相談室に電話し、D・A・Pを使ってみたらアゴが痛いんですよと、アゴをおさえながら神妙な顔つきで言った。（これもまた深読みすると面白い解釈が成立する）

番組最後に「あなたの考えるプロフェッショナルとは？」という恒例の質問が出た。松本の答えは、「素人に圧倒的な差をつけて、力を見せつける存在」。

(所感)

ブログで何度も言及している本『アフロディズニー2』で、現代において消費のメジャーはオタクだという仮説が述べられていた。消費と文化のメジャー的存在がオタクだとしても、ゴールデンタイムに放送しているアニメ番組は少ない。外国への波及力はオタクカルチャーに比べて少ないかもしれないが、地上波ゴールデンタイムを制覇しているのは、お笑いである。

お笑いもオタク同様差別の対象だったが、現代では、お笑いを下品だといって差別する人も少なくなかった。お笑いの価値向上に貢献したのは、松本をはじめとしたお笑い芸人たちだった。お笑いに対する差別撤廃の推進者となったビートたけしは、映画監督としての才能を世界で認められた。松本も、たけしに続いて映画を撮り始めている。2000年前後、松本は日テレの企画で、アメリカ人を笑わせに渡米していたが、あまり笑いを取れなかった。単純な笑いが好きなアメリカ人を笑わせることができないという挫折を経験した松本は、以後映画に取り組み始める。

90年代、松本の発言は、ウッチャンナンチャン、とんねるず、ナインティナインなど当時の代表格に比べて、圧倒的に面白かった。今は「すべらない話」を見ていても、松本より面白い話をする芸人はたくさんいる。たけしだって、別に現役最強で面白いわけではない。今後は、松本が映画監督として世界でどう評価されていくのか、注目したい。

フジテレビ『人志松本のすべらない話ザ・ゴールデン』

(2008年12月27日ブログにて発表)

フジテレビ系列で本日「人志松本のすべらない話ザ・ゴールデン」が放送された。番組冒頭は、芸能人、北京オリンピック金メダリストらが集まる客席で綾戸智絵がビートルズ「LET IT BE」のジャズアレンジをピアノ弾き語りで歌う。綾戸智絵が歌う後ろには、槇原敬之、青山テルマ、perfumeなどが映っている。若手お笑いブームはいつ終わるのかとずっと言われていたが、不況の今でもお笑い人気が続いている。有名俳優、金メダリスト、人気歌手がお笑いの素晴らしさを絶賛する中、吉本 中心としたお笑い芸人たちが、フリートークを行う。テレビを見ている一般視聴者は、スタジオの有名人たちと一緒に、お笑いの名演を鑑賞する気分になるという演出だ。

フリートーク会場は、ギャンブルのテーブルとなっている。テーブルを取り囲むように座っているすべらない話のプレイヤーたちは、ギャンブルのプレイヤーだろうか。ギャンブルのプレイヤーは視聴者、あるいはテレビ局、あるいはスポンサーかもしれない。

世間には暗いニュースが溢れており、人々が体感する社会の安全感は下がっているが、陰湿なことしか放送しないニュースとは裏腹に、お笑いが人気をとっている。お天気キャスターの愛ちゃんは「つらいことがあってもすべらない話のDVDを見ると元気になれる」と言っていた。綾戸智絵は「みなさんはみんなを幸せにする幸せ屋だ」と絶賛していた。

MVSに輝いた勝俣のすべらない話「欽ちゃん」が僕も一番面白いと感じた。千原ジュニアの「トキエ」、有吉の父親の話、次長課長河本の「好き、きもいのしりとり話」も面白かった。

ニュース番組と日常は辛いけれど、お笑い番組だけが、明るい知らせをみんなに届けてくれると言われる。けれど、お笑いでは「きもい」人が、笑いの対象としてよく取り上げられる。「いい話」を探そうとしていたケンドーコバヤシは、マンションの庭に、毎日じょうろで水遣りしているおじいさんを見つけた。ケンドーコバヤシはいい話を見つけたと思って、おじいさんに声をかけた。おじいさんは、ネコを殺すために毒をまいているんだと答えた。いい話と思ったら、怖い話だったというギャップがお笑いになっているわけだが、このように日常には「キモイ」行動が溢れている。

次長課長の河本は、明治神宮にお参りに行った。長蛇の列の中、列の後ろのカップルがしりとりを始めた。「す」が回ってきた時、男は「好き」と言った。女は「きもい」と答えた。「嫌い」でなく「きもい」なのだ。嫌いという感情よりも、きもいという感情の方が先にわき起こってくるのが、現代社会なのだ。

宮川大輔は、三又又三に坂本竜馬のドラマか映画に出演することを求められた。断ったら、三又又三が「表に出ろ」と言ってきた。宮川は三又に三発殴られた。怒った宮川が殴り返したら、三又は感動して、「これを待っていたんだよ」と言った。この出来事に対して宮川が言った言葉もまた「きもい」だった。

きもいとは何だろうか。すべらない話では主に、周囲とコミュニケーションとれない人たちが笑いの対象とされる。社会常識に反した行動をとっている人も笑いの対象になる。笑いとは本来、共同体の習慣から逸脱する危険な存在を笑い飛ばして、共同体の秩序を維持するものだ。すべらない話でもまた、笑いの社会維持機能が発揮されている。明治神宮で長蛇の列の中、しりとりを持ちかけて、告白した男は、きもいと拒絶される。好きと聞かれて、嫌いではないのだ。告白の仕方が気持ち悪い＝社会常識からはみだす危険な存在なのだ。殴ったら殴り返してくれるだろう、そうしてこそ、二人の間に絆が生まれると思っていた三又のロマンティシズムもまた、ひとりよがりのきもい行動として拒絶される。拒絶されるというか、笑いの対象になる。

MVSをとった、デビューしたての勝俣が、ボケた欽ちゃんを番組中、三発もおもいっきりぶったいて突っ込んだ笑い話。上下関係の暗黙のルールを守れなかった勝俣の行動が、笑いの対象となっていた。

お笑い芸人は本当に、暗いニュースが溢れている中、みんなを幸せにするために笑いを提供しているのだろうか。暗いニュースを伝えるニュース番組同様、お笑い番組は社会のルールからはみ出す存在を排除するために放送されているのではないか。それは言いすぎだとして、お笑い番組は、「こういう行動をとると、みんなにきもいって思われるよ、笑いの対象になるよ」という事例を視聴者に提供している。これは意外におそろしい教養番組だ。

な～んて陰謀論的に解釈することもできるけれど、まあこんなのはばかばかしい空想です。忘れて一生笑いましょう。

笑うとは、きもい現象を批判する行為かもしれない。

日本テレビ『ダウンタウンのガキの使い大晦日年越しSP!!笑ってはいけないホテルマン24時!!』

(2010年1月3日ブログにて発表)

昨年12月31日夜、日本テレビで『ダウンタウンのガキの使い大晦日年越しSP!!笑ってはいけないホテルマン24時!!』が放送された。ダウンタウン松本浜田、ココリコ田中遠藤、山崎邦正の5名が、笑わないよう耐える様子を延々6時間放送する番組である。笑ってしまったら、全身黒づくめの人間が現れて、ダウンタウンらのお尻を叩くという罰ゲームが行われる、くだらない番組だ。

大晦日のテレビは見る価値のない番組ばかりになってしまったとよく嘆かれるが、その筆頭が日テレのこの番組だろう。視聴者は、スタッフが仕掛けた笑いのネタを楽しみつつ、我慢しきれず笑ってしまったダウンタウンらが尻を叩かれる様子を楽しむ。こんな暴力的な番組を大晦日に放送しては、苦情電話がかかりまくりだろうと思うのだが、それでも日本テレビは放送してしまう。大晦日はこれでいいと、局の上層部が判断したのだ。日本の平和もここまできたかという絶望的時代状況だが、道徳的価値判断を一旦保留して、芸術作品を鑑賞するようにこの番組にあたると、『笑ってはいけないホテルマン24時!!』は、カフカの不条理小説そのものだと思えるのだった。

新人ホテルマンになったダウンタウンらがホテルに赴任すると、24時間の研修が始まる。研修中に笑ったら、どこからともなく全身黒づくめの男たちがやっつけて、お尻を棒で叩いて帰っていく。この物語構造は、カフカ『審判』の現代版としか思えない。

2009年度の放送で印象的だったのは、控室に用意されたDVDを視聴したら、無条件でぶたれてしまうことだ。DVDをかけると、『タッチ』や『翼の折れたエンジェル』などの懐メロを歌手ご本人が歌う映像が控室のテレビに現れる。途中から替え歌になる。歌の中でお尻を叩かれる人が指名される。歌が終わると、罰ゲームが始まる。これはもう理不尽の極致である。

通常は、権力者側が用意したネタを見ても、笑いをこらえれば、罰ゲームを避けられるが、DVDを視聴したら誰かが必ず罰ゲームにあう。権力に抵抗する契機を奪われてしまっているようだが、DVDによる罰ゲームは、上から無条件に与えられたものではない。机におかれたDVDを見るか見ないかは、ゲーム参加者の自主性に委ねられている。罰は結局、参加者の主体的選択によって与えられたのだと解釈され得る巧妙な仕掛けだ。

ココリコ遠藤の別れた妻、千秋が何度もネタとして出てくる。千秋は、ブリーフ一枚の中年男を愛人としてホテルに同伴しているし、ココリコ遠藤の実弟を「三代目おにい」として紹介したりする。

ここらへんの嫉妬心を刺激する嫌がらせは、カフカ的な人間の業に対する罰に見える。ビンタを与える存在として、毎年プロレスラーの蝶野が出てくる。アイマスクをして、無作為にビンタの相手を選ぶというルールが告知されるが、アイマスクはすけすけである。蝶野に作為的に選ばれた山崎は「見えてるでしょ！」と絶叫する。山崎が権力者側のルール不履行を指摘して、抵抗すればするほど、その様子を見ている他のメンバーは笑ってしまう。故に「いい加減あきらめて殴られるや！」という展開になる。

第一に、権力者側が参加者に対して、強制的にルールを押し付けてくること、第二に、告知したルールさえも権力者側は無作為に破る自由があること、第三に、あまりの理不尽なルールと罰に対して、ゲームの参加者側が抵抗の意志をなくしてしまうこと。ガキの使い大晦日6時間スペシャルが描き出す世界は、カフカの不条理な小説世界そのものであり、現代社会のアイロニックな鏡像でもある。

どんなにクレーム電話がかかってきても、日本テレビはこれを大晦日に放送する。何故か。大晦日に14%も視聴率がとれるからという理由は、それこそ不条理な説明にしかないだろう。この番組が大晦日に放送されるという現象に対して、誰も合理的な説明などできない。

(2008年11月25日ブログにて発表)

11月25日22時より、NHK総合で『爆笑問題のニッポンの教養スペシャル 爆笑問題×早稲田大学「平成の突破力」』が放送された。東京大学、慶應義塾大学、京都大学と続いてきた公開ライブ、今回は僕の小学校時代からの憧れでもある、早稲田大学が舞台となる。早稲田の学生を見ていたら、小泉容疑者の殺人計画ニュースでぐったりしていた気持ちが、いくらか安らいだ。

タモリ、村上春樹、久米宏、筑紫哲也に象徴される早稲田の自由さ、奇怪さがずっと好きだった。東大、慶應、京大の学生よりも、やっぱり早稲田の学生は、やかましく、自己主張が強い変人ばかりだった。早稲田の卒業生でもないけれど、早稲田の卒業生だと思って、明日から人生を生き直してみようと思った。

ゲスト出演教授には『東京大学「80年代地下文化論」講義』の著者でもある宮沢章夫がいたけれど、やはり目立ったのは田原総一郎だった。田原総一郎をNHKで見るのは珍しかったし、爆笑問題太田との対決も見物だった。

田原は、日本の総理ですごいと思える人をあげてみてと太田に言われて、田中角栄の名前を挙げた。太田は、田中角栄なんて金のばらまきだと批判したが、田原は猛烈に反論していた。田中角栄は血筋のよさも学歴もないのに日本のトップまで上り詰めた、階級社会の日本を壊した、田中角栄は革命だったと田原は主張したが、太田は納得していない様子だった。

番組中、田原は今の時代はものすごいチャンスに溢れていると言った。来年の1月20歳になる新成人は、平成生まれの大人となる。冷戦崩壊、昭和天皇崩御に生を受けた、現代の大学生は、ゆとり教育を受け、バブルの絶頂と崩壊を体験し、「失われた10年」と「実感なき好景気」を体験し、オウムと阪神淡路大震災と同時多発テロと世界同時株安を体験した世代だ。既成の価値観は全て崩壊し、今後の世界理念が見えない今だからこそ、チャンスの時代である。太田もまた、田原の現代を肯定的に捉える意見には共感していた。

太田は自己肯定感が強いというか、無理矢理自己肯定している節がある。なぜ自分の人生を肯定しようとするのか。太田は、尊敬する北野武が、芸人として成功した人生を肯定していないのを批判した。他人には容赦ないが、自己は力強く肯定しようとする太田の様子が、ニーチェっぽくて、見ていて面白かった。

絵本作家になって子どもたちを勇気づけたいと、純真に、真正直に告白した33歳の学生は、他の早稲田大生に拍手で迎えられたが、太田は、そのままじゃ成功しないと言った。

社会はぐちゃぐちゃで、菌まみれで、ひねくれてるから、純粹なものは馬鹿にされて受け入れられない。こうした社会を相手に、いかに自分の想いを実現させていくか。そのためにはひねくれて、こりにこったすごい表現をするしかない、それが芸だ、と述べる太田。

大学の講堂を舞台にした公開録画では、いつも決まって太田本人の力強い人生観、「芸」観が述べられる。グロテスクな社会、マスメディアの中で、それでも表現し続けていこうという意志、ひねくれまくっているふりを装いながら、その奥にある思いを表現していこうという強い意志が、番組の最後に表明された。

NHK『爆笑問題のニッポンの教養「「芸術は“カラダ”だ～美術解剖学・布施英利～」』

(2009年2月18日ブログにて発表)

ベンヤミンは個人的にめちゃくちゃすごいと思うのだけれど、日本社会的には爆笑問題の方が社会認知度高いわけで、ベンヤミンの記事だけではアクセス数が不安だから、爆笑問題の人気番組を取り上げてみる。

NHKで昨夜放送された『爆笑問題のニッポンの教養』、今回は「芸術は“カラダ”だ～美術解剖学・布施英利～」ということで、東京芸術大学が舞台となった。

芸術家は人体をずっと描いていたという。ダ・ヴィンチのモナリザが人体芸術の代表例として紹介された。

太田はモナリザなんて美しくないという。そう言われれば、モナリザは美しくない。なんでこんな絵、みんなが美術の代表として崇拝しているのか、わけがわからなくなってくる。しかし布施准教授は、最初は美しくないと思うのが芸術だという。

最初はすごいインパクトもなく、社会から否定もされるのだけれど、じっくり、こまかく、時間をかけて見ていくうちに、作品の価値が理解されてきて、末永く評価されるのが芸術。

布施が芸術と対比しているのは、テレビだ。ここで太田が「ただだよ」という。そう、アカデミー関係者のテレビ批判に、太田は何度も、かみついてきた。今回も対決の様子を見ることができた。

アカデミー側は、テレビなんて一時のもので、最初は刺激的で人気を集めるけれど、すぐに忘れられるという。何も残らないテレビ番組。テレビ低俗批判に対して太田は、テレビが一番影響力を持っているし、俺は歴史に残る芸をしようと思ってやっていると言い返す。

確かにベンヤミンの『ドイツ悲劇の根源』の書評なんて書いたところで、認知もないし、人気もない。NHKスペシャル『沸騰都市』の記事を書けば、何人もの読者に検索される。太田が言うように、芸術や哲学に比べて、テレビの影響力と認知度は恐ろしいほど強大だ。テレビなんてたいしたことないよというアカデミー側の布施さんも、歴史に残る芸をやりようとしていることは、いいことだと言った。そこで対立が和らいだ。

アカデミー側は、長い時間継続するものを尊ぶ傾向がある。テレビやネット文化はバロック的で、断片の積み重ねだ。最初は面白くても、すぐに廃墟になる。テレビで太田が見せている活躍、抵抗はすばらしいものだが、太田は結局、永続する、時代を超越する普遍的価値を求めていただけなのだろうか。

どこまでも変わり続けていく、ゴーストのような存在を求める人がいてもいいのではないだろうかと思った。

NHK『爆笑問題のニッポンの教養スペシャル「ニッポンチャチャチャ」』

(2009年3月25日ブログにて発表)

ラシュディ『真夜中の子供たち』を読んで、近代化や歴史の問題について敏感になっている状態で、昨日放送された「爆笑問題のニッポンの教養」スペシャル『ニッポン チャチャチャ』を観た。WBCの日本優勝を伝えるニュースの後に放送されたが、トークテーマは「日本とは何か」。姜尚中、田中克彦、川勝平太などかつて番組に出演した大学教授陣が、日本について爆問とともに議論する。タナカツと太田が、アメリカに挑戦的な発言を連発していた。今度アメリカと戦争した時、勝つためには日本に何が必要かなど話も飛び出た。姜尚中は苦笑する。NHKなのにこんな問題発言放送して大丈夫かと思うのも束の間、こうした様々な問題発言を許容するのも、自由民主主義の強さなのだと感じる。

日本は戦後、アメリカに文化的に占領され続けているとタナカツが言う。まだ敗戦と、戦前文化の否定のトラウマから日本は立ち直れていない。この村上龍的なタナカツのドマツチョ発言は、現代日本のトラウマ臭を批判したものだが、戦後日本は経済競争に集中し、家電でも自動車でも、アメリカを抜いてナンバーワンになったと、川勝が反論した。確かに今日も日本代表は野球で世界2連覇を達成した。日本は野球のブラジルかと思ったけれど、ラシュディの『真夜中の子供たち』みたいな問題意識で日本の近代化を見つめる時、戦前の軍国主義と、戦後のアメリカ文化支配の問題から逃れることはできない。

自分のアイデンティティーを国家におきたくはない。ジョイス『若い芸術家の肖像』のステイヴン・ディーダラスみたく、「たとえ国家や家族であっても、信じていけないものには絶対仕えない」と宣言したいところだ。20世紀後半、ポストモダン以降の世界文学は、個人の歴史でなく、国家による「暴力」の歴史を問題化し続けているし、国家は信用できない。

タナカツの意見で唯一共感できたのは、「今年はめちゃくちゃ面白い」ということだ。不審なニュースが連発している。世界史において絶対の強権な父親だったアメリカが倒れる今、次の覇権を狙って多くの詐欺師が暗躍している。人類の歴史は清廉潔白な政治家が作るものではない。マスコミに流れる不審ニュースの裏で、表には決して出てこない真夜中の子供たちが、歴史を作っている。その暗躍を表に出して、歴史の再考を促すことこそ、モダニズムを経て、マジックリアリズムに到った小説家たちが成してきた、文学という仕事ではなからうか。

信じていけないものには何者であっても仕えず、集団による暴力の歴史を検証すること。これこそ現代文学の努めである。

NHK『爆笑問題のニッポンの教養スペシャル「表現力!爆笑問題×東京藝術大学」』

(2009年8月17日ブログにて発表)

8月17日(月)NHKで『爆笑問題の日本の教養スペシャル「表現力!爆笑問題×東京藝術大学」』が放送された。東大、京大、早稲田とスペシャル版を観てきたけれど、東京藝大での対話が、一番身につまされた。なんつっても、東京藝大の学生たちはみんな、表現者だから。

爆笑問題太田はより大勢の人に、自分の表現を届けたいという。クラシックとかジャズとか油絵なんて、日本じゃ需要ないだろうと批判する。オルガン奏者の女性は、オルガンなんて言ってもみんな聞きに来てくれないという。切実な問題。

爆笑問題太田は言う。ポキャブラ天国なんてあんな短い時間でやる駄洒落、やりたくないって言った芸人はたくさんいた。金儲け目的のプロデューサーに魂売りたくないっていう芸人は大勢いる。けれど、大事なのは、魂を売り渡しても、表現したいと思う機会が来ることなんじゃないか。自分が表現するお笑いを本当に愛していれば、お笑いを突き放すこともできるんじゃないか。プロなんだから、魂を売られる局面は必ずやってくる。その時、魂を売ることが拒否するのか。魂を売ってでも、やってみよう、面白いものを作ってみようかと奮い立つのか。

魂とはなんだろう。ジャンルに対するこだわり? 固定観念? ジャンルの垣根はドンドン溶解しているし。

こうした太田の主張に対して、それはテレビというマスメディアを中心にした考え方だと、菊地成孔あたりから批判があがる。ネットの時代はどうだろう。みんながどんどん表現できる。テレビの力はどんどん下がっている。ネットの情報技術によって、表現はとても生々しくなった。生々しいものを作れば、オルガンでもなんでもいけるんじゃないかと、菊地は言う。

ああそうだ。ブログの文章はどんどん定型文法から外れて、口語的に、生々しくなっていくし。小説も音楽もそうだし。

日本でオルガンやっても受けない。外国の教会とかでオルガン弾けば、聴いてくれる人もたくさんいるんじゃないか。日本は油絵もオルガンもジャズもクラシックもそんな聴かないけど、海外なら需要がある。日本なんて見限って、需要のある海外に飛び出してみたらどうなんだよという意見もあがる。

視聴中は、僕個人の境遇について想いがめぐった。魂を売り渡して、小説を書くことなんて、今の自分なら全然できると思った。格好良く定型で書くのをやめて、とっとも生々しく書くこともできるし。もうプライドも何もかも、ぼろ雑巾みたいになっているから、どんなことでも書ける。個人的には、トルストイとかプルーストとかクッツェーが凄いなと思うし、みんなにそれらの作家を読んで欲しいと思うけど、みんながそうした小説を求めているのなら、何のこだわりもなく、より需要のある小説を書くこともできる。

そもそも僕の魂は純文学にある、僕の魂と同化している純文学を書くのをやめて、エンジョイ要素満載のエンジョイ小説を書こうと思うこと自体、思い込みだ。僕はただ単に小説家になりたかっただけ。小説家になるためにいろいろ学んでいくうちに、トルストイやプルーストが好きだと思いつくようになっただけだ。魂の底からは、十九世紀末から二十世紀初頭の文学の成果を愛していないと思う。僕の魂は、ピュアな文学になく、やっぱりエンジョイできる文学にあるかも。

今日の僕は、人類が滅びの過程にあるのをどう回避するのがいいのか、小説の形式で考えようとしていた。小説家になろうと想い定める前の自分の価値観で考えたら、今僕が書こうとしている小説なんて、全く読む気がしない。クソ真面目でつまんなそうだし。

小説家になる気のなかった僕が手にする本とは、どんなものだろう。

小説家になる気もない僕が欲している本こそ、僕が魂から渴望している本なんじゃないか。僕が書きたい文章を書くのは、金輪際やめにしよう。これからは、書くことを仕事にしようと思いつめる前の、大学生以前の僕が、魂から渴望する文章を書いていくことにしよう。そっちの文章の方こそ、需要ありそうだし。

今までは小説を書きあげた後毎回、なんでこんな難しい話になってしまったんだろうと、悩んでいた。これからは、こんなやさしくわかりやすい話で大丈夫かな、ばかにされないかなと思いつめるような小説を書きたい。ばかにされないかなと思いつめる事自体、変なプライドのせいだ。読んだ人からいっばいばかにされる、変な小説を書こう。

途中から完全私事の話となりましたが、とりあえず、表現するということについて、大変な知的刺激をもたらしてくれた、情報量過多の番組でした。

フジテレビ『たけしの日本教育白書2006』

(2006年11月12日ブログにて発表)

土曜日18時から深夜0時まで、6時間ぶち向きで教育番組生放送があった。司会は北野たけしと爆笑問題とフジの女子アナ。特別ゲストに石原新太郎と久米 宏。たけしと石原と久米の三者対談が番組のメインだという宣伝。9時前から何度も、もうすぐ石原さん、久米さん登場ですと言いながら、二人がそろったのは11時過ぎ。この猛烈に長いひっぱりにはさすがにいらした。石原か久米が登場をしぶったのか、最初から登場は11時予定としていたのに、9時ごろからもうすぐ登場ですと告知して、視聴率を維持しようというだまし策略だったのか。

番組冒頭は昨今話題のいじめ問題。大人がしっかりしていないからだめなんだ、社会はもっと不正であふれている、学校は社会の反映だというコメントが出ていたが、この番組の異様なひっぱり方こそ、社会不正の好例ではないだろうか。もうすぐ石原さん久米さんが出ますと言ってから2時間も待たされた。それに対して、番組からは一切謝罪がない。世も末である。これでは社会と大人に対する不信感が蔓延し、子どもたちの間にいじめが流行するのも納得である。

ただ、番組はとても面白かった。テレビでこんなに面白い、危険な番組は久々だった。冒頭、いじめの現実が語られる。いじめ経験を持つ子供たちのいじめに対する討論は面白かった。「あれは仕事に疲れたサラリーマンの会話。大人の会話だ」という論評が的確だった。今の新卒は社会に出て使えないとよく言われる。学生たちは働き始めるとすぐ会社を辞める。学校は楽なのに、会社が地獄なのか。そうではない。学校からして生き地獄なのである。本当なら行きたくないのに通う義務。会社は厳密にいうと、義務ではない。転職が許される。もちろんいじめられて転校する子供もいるけど、転職の方が転校より気軽にできる。

番組後半は大人たちの社会マナーの悪さ、品格のなさが話された。お笑い中心のテレビ番組が、社会から品格を剥奪したかのようなお笑い批判説が浮上してくる。久米との対談でたけしは、もうしばらくしたら、日本がだめになった原因は全部俺のせいにされるだろうと言葉をもらす。そうかもしれない。お笑いをテレビのメインすえたのはビートたけしだった。

爆笑問題の大田が番組中さえまくっていた。あんなにいきいきとした、危険な大田は久しぶりだった。たけしと二人で危ない発言を連発。品格と教育についての番組なのに、いつもどおりの悪ふざけ。この危うさが魅力的だった。番組制作者は大田、たけし側の視点で番組を作っているのか、それとも教育や品格を尊ぶ石原的な右よりの立場で作っているのか、二つの勢力がぶつかる面白さを演出しようとしているのか、謎だった。

イギリスのパブリックスクールの品格教育のすばらしさを伝える映像の後でたけしは、あいつらは植民地づくりまったひどいやつらだと毒づく。

学校内である種宗教的とも呼べる倫理を教えこんでいる学校を伝える映像の後でたけしは、あれはあの学校の中だけの話で、社会に出たら公務員でもみんな不正している、あの子供たちは社会に出たら、不正だらけで耐えられないんじゃないかな、社会はもっとぐろいよと毒づく。

横綱の品格を伝える映像の後では、昔は相撲取りなんて人さらいと思われてたんだと毒づく。相手を気遣えば、失礼なことは言えない、マナーと品格を伝える番組で、たけしと大田はひたすら相手に対して失礼な発言を繰り返していた。これが実に逆説的で面白かった。

こういった失礼な本音の物言いこそ、テレビが広めた日本人の新しい流儀である。コギャルも小学生もみんな本音で語り、相手に失礼なことを言う。たけしがなぜこうも毒づくかということ、客観性を保とうとしているからだ。一方を褒め称える19世紀的なコミュニケーションでは支配構造が確定される。社会的に優れた人をほめたたえ、みなで感動を共有する。これで社会の支配構造が安定する。そんなの嘘っぱちだ、本当はあいつらひどいことしているんだよと告発すること、マナーをぶち破って客観的な批判、告発をすることが、落語家や報道記者の役目だった。たけしや大田は、客観的立場で自己と他者を批判し続けている。

教育と品格の番組は、実は裏に隠れたテーマを持っている。品格を尊ぶと、支配構造が安定する階級社会となる。品格、規律よりも表現の自由、行動の自由を尊ぶゆとり教育だと、スーパーフラットの高度消費大衆社会となる。日本が極度に平和だったからこそ、一億総中流となり、誰もがぶっちゃけて絡み合う社会になったのだ。お笑いブームが品格と教養の価値を下げたわけではない。日本社会が平和であり、支配構造が極度に安定化していたからこそ、品格や規律訓練が不要となったのだ。

なぜ今になって、品格や規律が叫ばれるのか。それは外敵が存在するからだ。企業は国際競争にまきこまれているし、アジアの政治外交もあやうい。しっかりしなければ、国力を根こそぎ奪われてしまうという危機感が、教育や品格の退廃を嘆いているのだろう。

しかし、規律や品格一辺倒になると、表現の自由が奪われてしまう。表現の自由と規律の両立こそが問題である。

フジテレビ『ウチくる！？』中山ヒデ再評価

(2008年4月13日ブログにて発表)

以前から時々、日曜正午のトークバラエティー番組「ウチくる！？」を見ていた。ずっと飯島愛が面白いと思っていたから、司会が久保純子に代わったら、つまらなくなるんじゃないかと不安だった。しかし、久保純子となった後も、「ウチくる！？」は以前と全く変わらず面白かった。番組構成の完成度が高いのだと自分を納得させていた。ナンシー関や松本人志の影響からか、司会である中山秀征を評価したくなかったのだ。

けれど繰り返し見ていくうちに、中山秀征みたいになりたいと思うようになった。テレビ番組は『アメトーーク』が業界的視点から見ても面白いし、評価されると思っていたけれど、いやいや、「ウチくる！？」こそが最高だと、今日、強烈な価値転換が起こった。テレビの見方が変わった日と呼べるだろう。

「ウチくる！？」前々回ゲストは柳原可奈子、前回はキム兄だった。どちらも個人的に好きだったから、番組は楽しいんだろうなと思っていた。今日は個人的にそんな興味がない羽野亜紀だった。羽野亜紀だったら見る価値ないなと感じたから、12時40分過ぎから、ちょっとだけ見ることにしたんだけど、「ウチくる！？」は相変わらずの完成度を誇っていた。バラエティー番組の鏡である。

羽野亜紀が家族でよく行っているという、文京区の焼肉屋。羽野亜紀とヒデ、くぼじゅん、準レギュラーの青木さやかが行ったら、デイブ・スペクターと、前田忠明が肉を食べながら待ち構えていた。別居の頃どうしていたのかとみんなで尋ねたところ、羽野亜紀は、ワイドショーでは報道されなかった当時の心境を語り出した。

実家で親が病気だったから実家に帰ったら、別居と報道された。すると実家の周りにカメラが集まり出した。タレント活動をしていたら、事務所に連絡してどうにかしてもらっていたが、自分はもう素人だったため、報道陣とうまく渡り合うことができなかった。カメラを前に何か一言言うと、編集されて、面白おかしく描かれてしまう。夫のことは愛しているけれど、夫を愛していますと言うと、母親と仲が悪いと書かれるだろうし、マスコミの前で何も言わないことが、一番いいと思った。夫の家に迷惑をかけちゃいけないと思ったので、その後友達の家を転々とした。今度また報道陣に囲まれた時、助けを求められるようにしようと思ったのが、事務所に所属して芸能活動を始めた理由なのだという。

別居報道当時は、羽野亜紀と和泉家は仲が悪い、夫とも母とも仲が悪いとテレビ全体が決めつけていた、タレント活動再開も仲が悪いのが原因とみんな決めつけていたと、前田忠明も認めた。こうしたやり取りを「ウチくる!？」は焼肉屋でやってしまう。何でも取り込む「ウチくる!？」は、まさしくバラエティー番組の模範であり、テレビの象徴である。その後、一行は、また文京区内のお店に食事しに行った。サプライズゲストは、子どもが同じ幼稚園に通う、素人のお母さん友達2名。今みんなの子どもは、もとやさん家で、面倒見ているのだという。

「ウチくる!？」のヒデさんを見ていると、誰でもお笑い芸人やれるんだ!、俺もお笑い芸人になれる!と思って、芸人を目指す人がいます、と誰かゲストが言っていた。しかし、テレビの世界はそんなに甘くない。ヒデは何もやっていないようで、彼にしかできない振る舞い、いわゆる「空気」を生み出している。

ヒデは言ってみれば空気が読める男。業界的に、よい空気を生み出すことができる男であり、それが評価されて、司会業をこなしている。ヒデはお世辞がうまく、ノリが軽く、たえず楽しそうだ。はたして、彼は何も面白いことを言っていないのだろうか。

今回の放送では、アイドル時代の思い出写真として、アイドル雑誌「明星」が取り上げられた。そこに当時19歳のヒデさんの記事も出ていた。コンドームを買ったんだけど、どう使えばいいのかわかりません、という読者からの質問に、19歳のヒデは、デートに行く時は、やる前からつけとけばいいんじゃないと、答えていた。こんなとっぴな回答は、並みのお笑い芸人ではできない。芸を磨きたかった相方に対して、ヒデはバラエティー路線にシフトして、地盤を固めたとよく言われるが、ヒデのこの発言を知って、ヒデこそ当時から実力があったのだと思い直した。さらにヒデは、プロなら向こうがつけてくれるけどね、とも答えていた（ヒデは当時19歳のアイドルである）。俺は19歳になる前にプロテスト合格してたから、などと現在のヒデはコメントしていた。この業界的な身の軽さ、アカ抜け具合、遊び好きな感じ、すべてが中山ヒデである。

中山ヒデみたいになるのは簡単だ、彼には芸がない、あんなの誰でもなれる、そんな批判は嘘っぱちだ。ここまで突き抜けられるのか、業界に染まれるのか、ということである。

ヒデは見た目若いから、気づかなかったが、他の男性パーソナリティー、おじさん司会芸能人たちと比べてみればよい。小倉さんも、みのさんも、タモリも、あるいは仲居君も、司会業務中にそんな面白いことを言っているわけではない。発言の深み、面白さなど比べると、ヒデは他の司会者陣と、そんなに変わらない。その異様な業界的軽さ、内容のぶっとびすぎるまでの空虚さ、芸術的ともいえる「空白」感が目につくだけだ。その透明感は、ヒデと全く正反対にあると思える、禅の域に到達している。現代における民放テレビ番組視聴とは、禅の瞑想となんら変わらぬ、空を体験する至高の時間なのだ。現代社会が抱える問題、可能性の全てを、「ウチくる!？」とヒデが抱え込んでいると宣言しても、過言ではないだろう。

業界の処世術は、中山ヒデがすべて持っている。空気が読める人といったら、皮肉に聞こえるかもしれないが、中山ヒデの右に出るものはいないだろう。私は貝になるより、中山ヒデになりたい。「ウチくる!？」に呼ばれるような、まっとうな社会人になりたいと思った、日曜の午後だった。

テレビ朝日『新婚さんいらっしゃい!』がテレビ最大の前衛番組だった

(2009年5月3日ブログにて発表)

日曜日の朝はテレ朝「サンデープロジェクト」、TBS「サンデージャポン」、昼はテレ朝「サンデースクランブル」、TBS「アッコにおまかせ!」をいったりきたりするのだけれど、午後13時からテレ朝で始まる桂三枝、山瀬まみ司会の長寿番組「新婚さんいらっしゃい!」が、全テレビ番組中最も前衛的だと最近思うようになった。

数十年前から毎週毎週日本全国の新婚さんがゲストでやってくるのだけれど、毎回新婦さんが語る赤裸々なシモネタがすごいレベルになっている。お嫁さんが、新郎との馴れ初めを語る。だいたい毎回初めてのエッチはいつ、どんなタイミングだったとか、最近の性生活模様などを新婦が暴露して、新郎はその特殊な性癖を笑われる立場になる。これは本当に革命的な番組だと思う。何故かといえば、女性側がここまで赤裸々に性について語る番組は、他にどこにもないからだ。

深夜放送されているエッチな番組は、男側が積極的にシモネタを語る。司会役で出ている女子アナは赤面しながら、男の論理で語られるシモネタに苦笑する。これでは、単なる女子アナへのセクハラ番組だ。深夜にグラビアアイドルがエッチなポーズを取るのも、男の欲望に奉仕する性に過ぎない。一方、「新婚さんいらっしゃい!」は、女性中心に性が語られる。お嫁さんの性の思い出話を聞いて笑っている会場のお客さんが、全員おばさんというのもすごい。性欲絶好調の20代若者が対象じゃない。日曜昼、おばさんたち向けの番組で、一見超堅物の定番番組のように見せておきながら、実際は全テレビ番組中最も女性の性欲が解放されているのだ。ドラマもバラエティーも深夜番組も、ここまで前衛的になれていない。

今日の放送では、市議会議員の新婚さんと、日本在住中国人カップルの新婚さんが出演していて、どきりとした。明石出身の市議会議員の奥さん（20歳）は、結婚前、夜景を観にデートに連れて行かれた。あそこに夜景を観に行ったら、すぐホテルでエッチだよと女友達から聞かされていた奥さんは、覚悟をきめてデートに行ったのだけれど、夫はホテルに誘わなかった。奥さんちの門限が夜12時であったため、ホテルに誘えなかったのだという。奥さんは、お母さんが寝てから（「お父さんは死にました」とのこと）、家の窓からこっそり抜け出して、未来の夫に会いに行ったのだという。

さらに奥さんは、最近市議会議員の夫が、高校時代の制服を着てくれと言ってきて、うるさいと不満をもらす。「制服を着せて、エッチなことをするのが目的なんです」と奥さんが暴露する。おいおい、市議会議員なのに、そんなことテレビで言っちゃって、大丈夫かと思う。「制服姿を見たいのは愛する奥さんだけで、女子高生全員に興味があるわけではありません」と、コント調に市議会議員が言ってなんとかその場がおさまったが、新婚さんが市議会議員でも容赦なく性の解放ネタにもっていく「新婚さんいらっしゃい!」の前衛性は、今日もすさまじかった。

続いて出演の在日中国人カップル。日本でサラリーマンとして働く夫は、奥さんに対して結構偉そうに文句を言う。三枝が「奥さんにそんなこと言っちゃいかんよ」と夫の暴言につっこむ。夫は三枝のことを「先生」と呼ぶ。「中国の人はみんな先生と言うのよ」と三枝が喜ぶ。夫は「奥さんが仕事に何度も携帯に連絡をよこすので、迷惑だ、日本企業では仕事に奥さんの相手をしていない」と文句を言う。そこで三枝がすかさず奥さんをフォロー、「日本企業は昔そうだったかもしれないけど、今はみんな奥さん大事にするのよ。奥さん中国から来て寂しいんだから、あなたも奥さんのこと大事にしなきゃだめよ」。

中国社会は、近代化、都市化が進んでいる日本よりも、上下の敬いを大事にする。上下関係を大事にする社会ではしかし、女性の権利が小さくなる。日本みたいに上下関係が崩壊しつつある社会では、目上の人に対する尊敬とか古い価値観が崩壊しているけれど、逆に今まで低い立場におかれていた女性の立場が上昇した。「新婚さんいらっしゃい!」では、今日も近代化と女性の権利向上をおしすすめるため、新婦が性を赤裸々に語っているのだろうか。何かよくわからないけれど、素人の女性が男性の欲望に奉仕するためでなく、自分自身の性を語る番組は他にない。「新婚さんいらっしゃい!」は日本における最重要番組だろう。今後も要チェックだ。

フジテレビ『爆笑レッドカーペット』

(2008年9月4日ブログにて発表)

『エンタの王様』はマンネリ化してきて面白くなくなったけれど、フジの『爆笑レッドカーペット』とTBSの『あらびき団』は面白い。両番組とも芸人のネタ時間が、既存の番組より極端に短い。映画が流行り出すと、長編小説は長すぎると思われた。テレビが流行り出すと、映画の2時間は長すぎると思われた。インターネットが出ると、テレビは長すぎると思われた。携帯が便利になると、インターネットは長すぎると思われた。現代社会はどんどん短くなっていく。

『レッドカーペット』のネタ時間は、YouTubeで視聴するのにちょうどいいネット社会サイズ。個人的には出演芸人を突き放す演出をする残酷な『あらびき団』の方が好きだけれど、『レッドカーペット』は安心してみる事ができる。

今週放送分には、なだぎ武が出演していた。なだぎ武は以前出演時、「ややこしや～、ややこしや～」のモノマネをして、ネット上でもそれが何回も放送されたが、今日はねずみ先輩のモノマネをしていた。ねずみ先輩と言えば、歌手だけれど、極めてお笑い芸人に近いネタをやる旬の芸能人である。人気があるけれど、みんな手をつけない芸能人のモノマネをする着眼点がまず面白い。「ぼっぼぼぼぼ一んぼ一ん」とねずみ先輩のマネをして歌うのだが、最近流行りの迫真のリアリズムモノマネではない。正直あまり似ていないけれど、なだぎ武の個性が出ていて面白い。

満点大爆笑をとって、照英に「完成度が高い」と評価されていた。ネタ見せ時間が短くなればなるほど、芸人の芸は使い捨てみたいに単純になり、インパクト重視で、すぐ廃れる芸風になるのではないかと危惧された。どんなにネタ時間が短くなっても、王者として君臨するのが、完成度の高い芸を見せてくれる人だというのが、喜ばしかった。なだぎ武のネタは毎回安心して見ていられるし、いつも上手いと唸ってしまう。

僕は今まで、ミスがないことよりも、強烈な個性を持っていることを評価していた。オリンピックのフィギュアスケート、新体操、体操、シンクロナイズドスイミングなど、ものすごいカッコいい演技をしている人でも、ちょっとでもミスすれば、減点されて、金メダルを取れないのが許せなかった。

賞レースものは、ミスをしないこと、完成度が高いことが重要とされる。ミスのなつまらない演技より、荒削りだが、面白いものを評価したいと思っていたが、北京オリンピックの対戦系スポーツを見ていて、考え方が変わった。ちょっとしたミスで試合の流れが大きく変わる実力の拮抗した国際試合では、一つのミスが命取りになるとよく言われるが、野球の決勝トーナメントを見ていて、それを実感した。G.G.佐藤がフライをとれず、エラーを起こす。そこで失点する。どんなに撃てても、個性があっても、ミスをすると、優勝できない。芸術系の競技で、ちょっとしたミスで減点する審査員をひどく性格の悪い奴らだと今まで思っていたけれど、それが勝負の世界なのだと気づいた。

なだぎ武には隙がなく、安定している。カムバックレッドカーペット出演時は、ねずみ先輩の格好をしているんだけど、最早ねずみ先輩ではなく「しょっしょっしょしょしょーえーい」と自分を絶賛してくれた照英の歌を歌っていた。パンチパーマのかつらの下には、照英の写真が貼ってあり、それがまた驚きを呼んだ。何故照英の写真を用意できたんだと今田に聞かれたら、短い時間で、スタッフに大至急用意してもらったという。これをやったら面白い、笑ってもらえると瞬時に判断し、的確にツボをついてくるその能力、完成度。これぞ芸である。

芸は、超ショートコントでも成立する。

TBS「あらびき団90分拡大スペシャル」

(2008年10月2日ブログにて発表)

昨日深夜、「あらびき団90分拡大スペシャル」が放送された。「あらびき団」は、東野と藤井隆が司会の、芸人の短いネタ見せ番組である。時として全然面白くない芸人のネタを、視聴者含めてみんなで小馬鹿にしながら楽しむ、邪悪なお笑い番組である。面白くないことを面白がるという、デュシャンやジョン・ケージみたいな、既成の価値観を破壊する喜びを感じることができる。

最初のスペシャルゲストは、ダウントウンの浜田雅功だった。面白くない芸を面白がるという番組のノリに浜ちゃんはついていかなかった。始終厳しい表情でネタを見つめる浜ちゃんが画面下部に表示される。いつもは芸の「面白くなさ」につっこんで笑いをとる東野も、浜ちゃんが全然笑わないので焦っていた。番組出世頭の一人、はるな愛の「エアあやや」も、いつもあればっかりやんと一刀両断にされた。スタッフの冷めたカメラワークと、ごく一部の芸のみを浜ちゃんは評価していた。俺が遅れてんのかなあ、などとぼやく浜ちゃんを、必死で持ち上げる東野と藤井がいた。

番組後半のゲストはテリー伊藤。テリーは「あらびき団」を大絶賛しており、芸人たちのことを、こいつら全員畳の上で死ぬそうにないところがいいと評価していた。東野自身が言及していたが、あらびき団はテリー伊藤が「元気が出るテレビ」や「アサヤン」で作った、面白くない素人をスタッフの演出によって面白く見せるという手法を継承している。テリー伊藤の元で修業した某Pが作り出した「電波少年」は大流行した後、やらせ演出が批判された。昨今ではニュース報道でもやらせ演出に溢れているが、「あらびき団」は、やらせ演出という手法の向こう側に到達したと考えられる。芸人が面白くなければ、嘘でもついて、無理矢理面白くするのではなく、面白くないことの面白くなさをあざ笑う演出。あらびき団は既成の価値に無理矢理近づこうとするやらせ番組と異なり、何が面白いのかという価値観を破壊する革新者なのである。

しかし、こうした番組に人気が出ることは、旧来の芸人にとっては危機である。芸人に実力がなくても、演出次第で笑えてしまう。スタッフによる演出のうまさで売り出された芸人は、ダウントウンなど本人による自己演出の巧みさで成功した芸人と違い、すぐに飽きられる運命にある。浜ちゃんとテリー伊藤の反応の違いが対称的だった。テリー伊藤と一緒に番組を作って、座っていればそれだけで面白いという位置にまで自分を高めたビートたけしの先進性を感じた。

TBS『ウンナン極限ネタバトル!ザ・イロモネアSP』

(2009年1月17日ブログにて発表)

1月17日、TBS系列で「ウンナン極限ネタバトル!ザ・イロモネアSP」が放送された。

今回の出場者は、オードリー、狩野英孝、キングオブコメディ、ゴー☆ジャス、ザブングル、Wエンジン、超新塾、チョコレートプラネット、どきどきキャンプ、ハム、はんにゃ、髭男爵、響、我が家。「レッドカーペット」などでもおなじみの、お笑い次世代の芸人たちが集まった。

面白かったのは、「エリザベス！」が笑いを誘うザブングルの振る舞い方だった。

通常イロモネアでは、お客さんを敵に回すと、落選しやすくなる。お客さんを批判したり、自信満々で強気すぎる発言をすると、たとえネタが面白くても、お客さんが笑ってくれなくなる。100万円獲得を目指す芸人たちは、笑いの空気を作ることが重要だという。ネタの前に場の空気をよいものに変えるために、芸人たちは、初々しい感じを出そうとする。

今日の出演者では、はんにゃの振る舞いがまさにイロモネア的だった。最初は強気かつ余裕で、わりとゆっくりしたテンポのネタをやったら、制限時間終了間際までクリアできなかった。2回目以降、はんにゃは戦略を変えた。「僕たち、若手お笑い芸人です」というフレッシュさ、謙虚さを前面に打ち出した。お客さんへの挨拶もはきはきと気持ちよく、ネタのテンポもよくなった。すると開始すぐにクリアできるようになった。

イロモネアはシビアなサバイバルである。そうである分、お客様サービスが必要となる。こういう空気作りは、ある意味芸人が持つ笑いの毒々しい力を奪ってしまうと思っていた。

そんなビジネスマンみたいな振る舞い、芸人には不要でないだろうかと感じていたら、今日のザブングルはやってくれた。開始から強気発言 連発、芸人たちも、会場も敵に回して、ヒール役を買って出た。媚を売るよりも、毒を吐いてくれる方が、嬉しかった。お笑いを含めた芸術は、一般社会からみれば破綻した、アウトローな、ダークで、性格が悪くて、最低のやつのためにあるはずのものだ。芸人がお客さんの価値観に迎合してよいものだろうか。社会の価値観を破り捨てて、毒を振りまいて欲しいのだ。

ヒール役のザブングルも、イロモネアの鉄則に従ったはんにゃも、ファイナルまで進んだ。上記2組を含め、オードリーも、超新塾も、客席からランダムで選ばれた5人全員を笑わせて、100万をとることはできなかった。

イロモネアでは今後も、ザブングルみたいに、お客さんを敵に回しても、クリアしていくことができる、ヒール役の芸人の登場を期待したい。

TBS『タイノッチ どっちが相田みつを？ゲーム！』

(2008年12月3日ブログにて発表)

TBS系列で12月2日(火)23時59分より「タイノッチ どっちが相田みつを？ゲーム！」が放送された。「タイノッチ」とは、大人げない大人のあそびを提案するトークバラエティー番組。出演はTOKIOの国分太一、V6のいのっち、千原ジュニア、平岩紙。国分、いのっち出演でTBS深夜ということで、前クール終わった長寿トーク番組「R30」の後継番組と目される。

今日行われた「どっちが相田みつを？ゲーム」とは、相田みつをの本物の詩と、千原ジュニアが書いた相田みつをっぽい詩を並べて、どちらが相田みつをの詩かを当てるゲームである。勝負は、出題者(千原ジュニア)対回答者(国分、いのっち、平岩紙)で行われた。負けた方が、罰ゲームとしてゲーム会場となるふぐやの料理代支払いを行う。

(例題)

A「もううそはつかないと またうそをつくわたし」

B「これでいいとは思いませんが これしかできないわたしには」

A、Bのうち、どちらが本当の相田みつを作品かを当てる。この問題の答えは忘れたけれど、

(例題2)

A「あなたの背中が素敵なのは あなたが前を向いているからです」

B「自分のうしろ姿は 自分じゃみえねえんだなあ」

Aは千原ジュニアの贋作で、Bが本物のあいだみつをの詩。番組では相田みつをっぽい筆書きの色紙で、A、Bの詩が並べられた。千原ジュニアの詩は本当によくできていて、回答者たちもよく間違えていた。

「苦しい時が上り坂 楽しい時が下り坂」

上記は一見相田みつをの詩っぽいけど、千原ジュニアの詩である。自分が現在天童荒太の『悼む人』を読んで、スピリチュアルっぽくなっているせいか、とてもいい言葉だと思った。千原ジュニアが作った詩だと知って、千原ジュニアの仏のような笑顔の裏には、こうした思考が渦巻いているのだなと思った。

他にも何個も、千原ジュニア作の詩でいい言葉があった。印象的だったのは、いのっちの振る舞

이었다。いのっちが相田みつをの詩だと思う作品は、だいたい千原ジュニアの作品だった。国分が、相田みつをの詩はAだと言っても、いのちはBだと思っている。「いのっち何回も間違えたんだからさあ、俺の意見を聞けよ」と国分が言う。するといのちは折れて、国分の意見に従う。「俺の長所は折れるところなんだよな、太一君」といういのちは、大人だと思えた。

自分の信念をまげて、国分の意見にあわせて、見事正解して喜びのうちに神の降臨を見た。いのちのような存在が、ジャニーズ事務所と芸能界で力強く生きていくためのコツ、それは「折れること」だったのではないか。自分の直観、好きなことなど捨てて、心を折って生きたからこそ、結婚タブーなジャニーズ事務所で、キムタクについて、結婚発表できたのではないか。

いや、いのちの長所が心を折って、周囲の波長にあわせてサバイバルしていくことならば、ジャニーズ事務所のタブーを破って、瀬戸朝香と結婚発表してしまうことは、間違いではないか。いのちは、ジャニーズ事務所の中で、自分の意見を貫き通したのではないか。

瀬戸朝香との結婚は、心を貫いた結果なのか、心を折った結果なのか？

.....ジャニーさんでなく、瀬戸朝香の方に心を折っちゃったからこそ、結婚した、と好意的に解釈したい。

「苦しい時が上り坂 楽しい時が下り坂」

千原ジュニアのこの言葉を心に刻みながら、いのちの長所「心を折って生きていく」という美德の力強さを評価しつつ、明日からもブログの更新を続けたい。

テレビ朝日『堂本剛の正直しんどい 公園で遊ぶ若槻千夏』

(2007年6月15日ブログにて発表)

昨日の「堂本剛の正直しんどい」公園で遊ぶだけで30分放送する企画は、本当にすごいと思った。チュートリアルも堂本剛も「こんなの放送しちゃっていいの」、「今から総集編にしようか」、「テレビ朝日上層部のみなさんすいません」などと、煩悶しまくっている中、若槻千夏だけがやたらはしゃいでいた。

公園で遊ぶだけであんなにも楽しいのか。最近「無意味が大事」とか「ゆったり生きろ」とか「終わりなき日常を生きろ」とか「ニートでオッケー」とか「世の中金だけじゃない」などという言説が通用しないほど、日本国内に貧困が広がっているわけだけど、若槻千夏の振る舞いはニート肯定的ですばらしかった。お金をかけるだけがテレビじゃないと教えてくれたように思えた。

けれど、そんな若槻千夏はニートではなく、なりたい人がいっぱいいる競争過多のグラビア業界で見事成功し、テレビやCMに出まくっているタレントである。メディアの人気者が、自分では成功して大金をもらっているのに、貧しい生活を肯定することはよくあることだ。まあしかし、若槻千夏は公園で遊ぶのは楽しいことだと態度で示してくれただけで、お金も物も不要だなど思想家的にメッセージを発信していたわけではない。視聴者の私が勝手にそう受け取っただけだ。

いやあ、あの番組はよかったなと思ったのも束の間、今日の「アメトーク」でも同様の企画なき、やる気なき企画が放送された。スケジュールの入っていなかった芸人を集めただけのフリートーク。これはこれで面白かったが、二日連続こうした番組が続くと、テレビ朝日のお笑い製作部は、今週忙しかったのかと裏読みしてしまう。

「正直しんどい」があれだけ面白かったのは、剛とチュートリアルがこんなの放送していいのかと絶えず煩悶していたおかげだろう。二人のひきと、若槻の無邪気さの対比によって、番組がマスメディア批判になっていた。

(2010年11月14日追記：芸能活動を突然休止して「古着大好き宣言」をした若槻千夏は、海外旅行後、渋谷の109に自己プロデュース洋服店を出展。初日売上1100万円越えは、109歴代2位の記録だという。古着を愛する自由人若槻千夏をリスペクトする10代の女の子は多いとか。やっぱり若槻は突き抜けている)

評論「お笑いの遺伝子とお笑いの文化の違い」

普段とは別の方面からお笑いの競争を見てみよう。お笑いの競争に参加している生命、すなわち漫才師、現在の呼び方で言えばお笑い芸人は、お笑いの遺伝子と文化から成り立っている。お笑いの遺伝子と文化とは何だろう。

生命体の持っている遺伝子と言え、その生命体を形作るための基本設計である。種に共通の遺伝子によってその種の体型、外見的特長、意思疎通の方法、繁殖方法、食物の摂取方法などが決まっていく。遺伝子はそれら全てを決定するわけではない。それらの基本、雛形を決定するのみで、遺伝子は文化が与える経験によって、様々な形質を生命に発現させることになる。

遺伝子と文化は不可分なものだ。動物たちも様々な文化を持っている。ある程度の脳を持った動物たちは、遺伝子による伝達以外の方法で、子どもたちに慣習行動を伝える。その慣習行動は、同じ種でも集団が違えば若干違ったものになる。遺伝子は文化が与える経験を受けて、生命体に様々な形を与えていくことになる。文化も遺伝子の両方が人に必要だ。どちらかが人のあり方について決定的役割を持っているわけではない。どちらもが決定的であり、相互補完的なのだ。故に人間には、多様な選択肢、自由意志の余地がある。

さて、お笑いの遺伝子、文化とは何だろうか。お笑いの遺伝子という言葉で伝えられるのは、代々連綿と続いている特長的芸風などを指す場合が多いが、そのような芸風は、集団的知識の積み重ねによって生じた文化の産物であると思える。ツッコミの様式、特徴的なボケ、関東と関西でのネタの作り方の相違性などは遺伝子によるものでなく、文化の相違によるものだろう。

ではお笑いの遺伝子とは何か。それは、笑うということ、その活動そのものに宿っていると想像される。笑顔は人間に特徴的な美しい表情である。人は微笑みあうことで、争いを避け、友好を結んだ。笑えば体の免疫力まであがるという。人の話のうち、どんなものに対して笑顔で反応するのか、これは半分遺伝子、半分文化による。しかし、笑うという行為そのものは、遺伝子が作り出したものだ。

漫才の競争を見て楽しいと思うこと、漫才をして多くの人を笑わせるのが楽しいと想うこと、これが笑いの遺伝子である。日本人はなぜお笑いが好きなのか。日本以外の世界でも、テレビ局では世界情勢に関するニュースやドキュメンタリー番組でなく、お笑い番組、バラエティー番組の方が、人気が高い。これが出版メディア等からテレビメディアが批判される理由ともなっているが、人が笑顔を好きなのは単純だ。笑顔を好きでいれば、笑顔を見れば、笑顔の遺伝子が喜ぶのである。

笑顔は友好と平和と文化の証である。笑顔に包まれていれば、遺伝子は攻撃されることなく生き残ると確信することができる。笑顔は暴力の対極にある、平和の親善大使なのだ。

本を読んでいるより、テレビを見て笑っている方が、人々はこちよさを感じる。なぜなら、本には笑顔がないからだ。小説の登場人物が笑っている様子を脳内で想像することはできるが、脳の中で笑いのイメージを作り出すよりも、テレビ画面に映る他人の笑顔を見ている方が、遺伝子は喜ぶ。故にテレビ番組は、出版物よりも、笑顔の出演者、場面が溢れていくようになる。

日本のお笑い番組は暴力的だとよく批判された。子どもたちの間のいじめを助長させる内容だと良識派に批判されもした。ユーモアにはブラックな部分がある。過激なユーモアは辛辣な効果を生み出す。他人に嘲笑されることは、屈辱である。本来友好を証明するはずの笑顔も、嘲笑になれば、途端に敵意の表明となる。その切り替わりには注意が必要だが、ブラックユーモアと嘲笑は紙一重である。

極上のブラックユーモアは、嘲笑という機能を利用して、社会風刺という批評活動を行うことができる。